往生禮讃に於ける発願文と晨朝六念の問題

戸田聖巌

序論

往生礼讃は浄土門に於て実践行儀として今に勝るものはなく、最も珍重愛誦さるる一面悲壮的行儀である。前序に於いて願生要義と専雑得失を説解し、往生の業は称名正行以外にはなき事を明し、正宗分に至つて六時に区分し実践行として恭敬的態度で至心に阿弥陀佛に礼念し、懺悔と廻向とによつて発願已りて至心に帰命する。然らば正定業はどんな利益があるか、後序に現世功徳として五種増上縁を出して、現世と当来の功徳を説きて一層誘発を促し無間断に称名を一切衆生に勧め、悉く佛願に順ずる事を欲せられ、永劫に苦海の巷に流転する衆生を悲憐し、善導の苦心がかくせしめたのである。従つて六時の礼讃行儀は虔敬な態度による、阿弥陀佛に取りすがる悲壮的行儀である。善導は六時毎に切々的な無常偈を出すはこれ、人心を覚醒するものにして、後に発願文に臨終の語を出すは、人間の欲陥を指示し、それは心理活動、作用をくまなく把握し、正定業を修すべきを自然に導き出せしめ、阿弥陀佛の法雨に浴すべくは、善導が教理を体得された偉大な力が往生礼讃行儀面の結晶であり、又阿弥陀佛に遵従せる真実の道である。この誘導に着眼し法雨に浴しながら、今讃に於ける無常偈の後に位する発願文と同じく晨朝六念に就いて研精し、善導大師の真意を明確

に高揚したいものである。

本　論

説偈発願已と発願文

往生礼讃いづれに於いても（但し中夜においては異なるも五悔の中に至心発願の文を掲げている）懺悔、作礼、説偈発願、三帰は各偈共に掲げている。例えば日没に於てその中に、「懺悔回向発願已至心帰命阿弥陀仏」（浄全四・三五九ノ下）の偈文がある。発願已と云って重ねて後に発願文を出せるは、これ発願文が如何に重要であり、往生礼讃一巻が発願を勧める事に終始一貫して、発願に帰結する事を明していると言っても過言ではあるまい。

こゝで問題になるのは、発願文が各六時偈に掲げ、各々の無常偈の後に誦すべきかどうか、先に掲げた偈文、日没の例の如く発願文も亦各々六時の無常偈にあっても、不思議な事もなく偈文の構成関聯からしても当然の様であり、具備されるべきでなかろうか、発願文が何時からか日没に限られてしまったのであろうと思う。三階信行に昼夜六時発願文あり、唐智昇の集諸経礼懺儀上（大正蔵四七・四六五）に之を載録せり、又或る時代によって日没、初夜、中夜、後夜、晨朝の無常偈末に、「発願回向」とある（注・明治二十八年三月十日発行（六時礼讃）、構成の場から研精すれば、「懺悔回向発願已」は懺悔の思念を起し消極的には過去に於ける種々の罪障を改悔すると共に積極的には将来に向って諸善を修せんと熱望するに至るのである。その善根を自他に回向して悠然の時に勝縁勝境の境地に入って、阿弥陀仏菩薩の来迎を得、彼の安楽國に生じたいと発願する心である。これを裏面から進められたのが発願文である。既に発願心は伴わっているので薄弱でなく、完

全な金剛心となる様に堅固に維持される事を強張されたものと理解される。すれば遺文は各六時無常偈後に必要となってくるわけである。

晨朝六念

無常偈の最後にある、晨朝各誦六念に就いては往生礼讃には何等の指示もない。礼讃私記巻上（浄全四・三九五）に六念には化教と制教との別があるが、平旦偈では制教の六念を用いるべきを説いている。然し往生礼讃に於て今日では化教の六念を用いている。平旦無常偈の素材なる摩訶僧祇律にいう六念とは制教である。然らば三階教においては如何に評取解釈したであろうか、捨戒を標榜せる三階教徒の七階仏名経には、今日寅朝清浄各記六念の下に明かに化教の六念が出してある。

台導は如何様に摂取したか、観無量寿経の上品上生の中に説かれたる修行六念の言葉を台導大師は観経散善義（浄全二・六一）に解釈して、六念とは仏法僧戒施天の六種の功徳を念ずる事であるとしてある。この故に今の平旦偈にある六念が、化教の六念と解すべきである。（註高僧台導大師御鈔照）。これについて疑問に思う。台導は往生礼讃に六念について指示していないので、観無量寿経上に上品に説かれてある修行六念を台導が観経疏に明している六念を結びつけて、記主の誤謬と可るはどうかと思う。晨朝無常偈文から推則すると制教の六念に相応すると云える。往生礼讃私記巻拾遺鈔（浄全四503上）によれば往生礼讃を行ずる様に依って、化制教の六念いづれの観点においてもよい様である。台導が往生礼讃に六念を出さしめた重要な問題と指示をしなかった複雑なものがひそんでいるのではなかろうか。三蔵海を説くに以て様様による事であろうと思う。西山は制教の六念思想である。

然し今日浄土宗聖典法要集の勤行法にて化教の六念に関する念仏教世大慈父、念法出離解脱門、

念僧諸有良福田、念戒無上菩提本、念施貧足波羅蜜、念天護法利群生という偈文を唱うる習慣の残っているのは正しく化教の六念である。往生礼讃の本意を得たものかどうかは問題があると思う。

（室貫四回生）